外九拾五人九拾二首の和歌有りとい[illegible]
うる事[illegible]略して投壺[illegible]
かくて後に酒宴を始めの座に物具折敷し
数々ふして来せの僮の声殿中に入たは皆
退出せ[illegible]帰出りて列十七日ふい伶人の年ゆ
を後亀[illegible]の撫物令渡と数[illegible]
義[illegible]たり十八日還幸有供奉の殿式行幸
の例に従ふ凡行幸八万民奉洋龍顔悲涙と
歎り哭を除くに事[illegible]ふ行[illegible]幸ひ歩しとし
國家安全の政事是ふ[illegible]大徳必を信を

得を石を得必を祈を[illegible]て古法ふも見[illegible]
くる事[illegible]

天[illegible]
[illegible]
[illegible]年
大樹源家光公
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

いせ人国七方式表紙乃眉をえらび数万の勇
士引率しつゝ八月中の十日江戸の都営を
出帆なりしむるの命乃御感り三所く
ありて御はしらみの清浦をしと御所乃
武かゝもし書きけつゝ人よりとゝ
おいけりしを是を抽ふつゝ所清せた
さるゝ心と添しくゝ伝ふ
市日の多加家川乃御殿よ 清浦をもし
なゝをを御心ゝ武
旅乃ゝいはしも和るし和出乃

無ゝゝゝ思ゝ日のか
市前藤沢の御旅館ふゝ多ゝゝ乃ゝ氣色を
御覧しゝ
えゝゝゝ御ゝ陸ゝもれゝゝれ
ゝゝゝゝゝゝゝ乃ゝゝれ
市前大磯ゝ昼の四中ゝゝゝ出ゝゝゝ道
ゝゝゝに清水松の新移り渡ふゝつゝゝ
成ゝ武
移ゝゝゝゝゝゝゝ海中の
仏ゝゝ波乃ゝゝゝゝゝ

おなし日ゆふつかた小田原の宿中をたち
暑さもしのぎかねる程なれとも四度より水をそそき
なとして涼をとる事しばしばつゝ水
をかけたらんかたちに思れて座敷をも
流さぬ事なしぬぐひとる座の西より
東へ流れる水の外なし
市三日人馬のかのしとゆんさう繁のゆへ小田原に
御滞留なりけれ共夜前の出物にこりひり
しほたるに白かきいやしき人とゝすゝ時よ

志ゝうふ心ふて世ゆ通すこゝろをおし
発さうゝ由とつゝねる世ゆ
ゝ心ゝ光ゝ
附ふるゝ人の世
市四日箱根路を通る繁のゆへ
ゝ人ゝ道も七ゝゝ箱根ゆ
姉ゝいつゝ遠ゝ
廿五日三ゝ出帆屋と
原より田ゝの浦とゝ
田ゝの浦ふゝ

行とはいとおろかなる
廿六日朝まだきより神原の御やしろ拝
みまゐらせ清見が関のいふまでもなくとおぼしめ
しつゝ寺を出ぬ

清見がせきしのびやきん石たちく
波の関ふるき月のかげうつる
清見がせきを過させ給ひて吏よりの久能の御社参有り
りう山嘗家の御まうでれ霊神世にてし
まふにちなひのきこゆ若しのるに
の御なる敬なりとうなしす山茶瑞きちくう

きれたいますうこもくものしたさんの山さんくんの感
ゆまり神前ひまりてゆきさとうしらん陣おんせす
のちかく斗もん通をせ給ふとて
いつまゝにてす光のいとふりて
れるし日駿河国さいく府ふ着御なる御中略
おろしきぶ富士も雲掛まゆ山りまりきりう
ろしす富士の泳をとりれるくおはしやあきん
いりとい山たいれ弗寺のよしおはをりて涙かく
忘れぬ泳ちる勢のりてるん

[illegible]の根ふくす雲[illegible]に
[illegible]すくすくしく行すいきい見え
大八日ヶ原の山とさい人さ繰[illegible]とう御供の人々
も口数つゐ藏つれ[illegible]ふやいと祝ふやかちかんへ
きゐとは賢しこあ
藏うれやうつの山道のうら津いふも
美ふとさいゆはけさ乃石井道
大九日田中の市殿と出さ勢張大井川小のきまと
なふ常しうけさ源瀬かいうしうやき
流ももしも氷乃[illegible]

大井川びるきれ水もしつうなは
世ふおつれこあまるる時うな
是うやさうよは中山ふうら勢なまさ未
遠よ道の很と思ーと石つあるとて
きゐくと二つし殿うふもるくさみぬ
こうやさいうるれや小夜の中山
掛川乃城郭よ入しせるふ行るこまつあ
祝ふ小つさかーつよ奉ひぬうとみさき
のロるうきやと作幸右くおとふうん右う
ゐる石りまへまはゐ歌右り利

みな月のそらくもせんりうの
そら掛川の里小米あれたし
毎月百濱松のそらふかつをふきふかつる秋の
風の音つれもさしにおわ〳〵ちらしえさす
きしらしあるうちとこそ夏はあさいやうう
れとのさまいこあり
一夜深き秋やまはるしん旅さらも
あれしいなつきいまきのかれも
ゆるしの行乗流したてまつる生弐法
こそ迎ありけすみ頭のたうきやにまこせ

のひにかのうけいとまうあたにかやすし事
ぜおはし出こそ頭ふ乃曇祖桜ちしこそ
白波院殿ちさん庵平廣ひあんなりしに山生弐郷
周衣およりんしこそ
二条ふやおひきりうあ小行赤乃
ふ代ともちこうさ桜松乃勢
時ふんしこそ世ふおとセ小平の印事も
思ちつけこそ張ひつ山おもし地色ふ出こそ
のひあ出ひいつくしこのけきかしあとおはさ
このみふけのとにあ〳〵れ乃かうしこ乃市心

さしかへられも四尊霊さいしゃのやま
つるかれさまふつかまつり者つくし英さしり
ゆきものうしゝ曲地よりとたれ給ひし社
乃明神い古相國の御うち神なれ給ひまつる
ゆゝ海しとゝ行ゝを出ゝ行ゝ二百の羽きさ
ゝ御社ゝ系おいしまゝ神文新加の神頃
ゝさいさしゝせゝ繰のひ時とさいゝ甚市教書
代表社の祝ふ下しゝ給有雑ゝゝ次市ゝ
見ゝゝさつ土ゝゝ軍神とゝゝ
いゝゝゝ四奉幣幸おゝゝ四ゝ

おゝ乃ゝ御ゝゝ海ゝゝ
きゝち孫乃ゝ海ゝ
相ゝゝ社ゝ
国二百ゝゝの入海と渡ゝゝ
ゝゝ浦乃ゝたふと
ゝゝつけきなみ乃入海
二百の御市日のふ吉田の四ゝと出市有ゝ
ゝゝ坂ゝ山中とゝゝ祇朝日かゝの
多ん市ふゝしきと市賢ゝ
ほとゝゝゝ来ゝゝ坂とゝ

日いかのしとといつる山中
冒岡崎より出市あり屋敷さしをせり
近きいつる小八ちしるんいひくてふ
渡り橋の名所有とこさいえし世ばたつもあり
うんも入ういふるさいけり其沢ふりさ
はちまのこひはるるとは上るれも
八ちしやむしふかまひまたれく
のいしろ沢乃うまつるもれ
名所い名護屋より市通津有りいりしろはく
るしいふもさしるる梨二の丸より夫神乃市夫原

おくしまいく其砂ふ山水をうしし所くの
殿俗さいかしさの人舎りけをつくし猪
市往来めぐりるやかさより渡市ほくおかみさ
遊人をせりとを
六日おさやを出市有る萩原の名ををさせふ
とくく
杜里ふ行てあをあちめや萩原
秋のしをんのさひ乃り未
七日の桜より屋表根の巴ちふく門殿
七のひくく四夕をくみのおりしを二ッのほし

乃はの面くをとゝ
秋の夜は千よに一夜ふるをもやる
こゝろかりをたゝ[illegible]なゝ
八日なゝしにつゝをゝふ佛道の行法よみえ
しぬかゝみみるんかれをとゝ行へ勢
給つをかゝをゝひしたいしをまきをを
れもかしをさをと思ふゝ英ゝ
きひの法ゝれ乃ゝ者いうつさ
九日いゝを安殘ゝあつをふかせをゝたゝこゝ
さし波ゝにかの海つゝも靜かゝれい屋ゝせ
ゝ市船ふ見ゝ渡ゝせをふゝを
渡風を志ゝきゝをゝ行ゝ路や
よきゝゝせの井ゝをゝゝ行
十日せゝの行城ゝ西津ゝ勢ふ
十一日都ゝ入ゝせゝふ市行瓶の巍ゝ海ゝゝ
いゝゝかゝをゝ行ゝの人ゝ綾羅錦繡とかをを
とにいゝゝねゝもいゝ
保をゝす馬ゝの奥ふゝ迄ゝ月さゝきゝ
成ゝれを粟津ゝ京ゝ打ふの濱大津の浦の波
をゝゝ木をゝふゝ朝ゝをゝ光行ゝ

そよ草の御道もくしけれおほえし下ちなまし〳〵
ところへころく見物のよそほひ僧俗男女ミち道
尺地もなくしけす並居つゝはしける袖の色くし小
野山も更とさへまさしかや中も諸人かしら重
成しくみ帝へ行幸まつり事行てかきまさとしの
とも承のうへ御門かかれと譲りまさりおそ給ひし
のおほしひとるしく候ひ逢坂山と越させ給ひ
し都なりしくなれしまゐらせきこえくせしき
と御覧しけるに
にうき路やうちよせ逢坂の関いえりらく

さしものうちつらね乃人袖ぞ見わたされ
御関むかへしまゐる月卿雲客上下しもの人々
東京の大小名洛中の町よりおもひ〳〵かさり路
居たい敬まゐらせ候ゆへ始めてれのたり時しも二条
の御所に着御ならせ給ふ目おどろかし次第之
二条の御所にしつらせ給ひし後およそ中宮事此
此ところ代々せしは東乃都にてしさに花の
ことさいはまさる名れり此時は始めてやまことにひさく
候つきの御所みをおほしおぬとのことをひさく
御たとしるる花の都もむさし野へ

我が里の海を見よ
清盛卿十八日に定りしものの日のうちつき院宣
蒙り下りて伊勢の国三代の武将をつ
慣のむ天下をたゝかふ事ありしより
もて免て朝廷に参りまいらの始祖といひさ家の
こと世の相国のかれいとしもさなれほどさおかいま
うち君の御ゆくへいまさせかゝしと思きりか
のまゝにもなれともも光則卿の御つを思うつい
物ふけすまして冥土をつゝしませの御心
いとかたく祥しのひ如なるこの世のをつを

みてをかさけ業のかたをうくらはまねしまし
ろうきをこまこまこうはかくはかしめしつる
あうせのやうく
くゝいふ心のうれしみちとさけい
世の御うを悟かくもかう御う

天和二年中年業月下旬寫　心流

文政八乙酉年初夏中二日寫　石勝任